

《漢詩4》「イメージで読む鑑賞文」の書き方

文学作品を読むときは、まずその情景を心の中に思い浮かべる（＝イメージする）。そのイメージを通じて、感じたり、考えたりしてみるのもいい。そのため、イメージする学習を今からやってみよう。

今度は自分なりの「考え」を付け加えて、「鑑賞文」にしてみよう。これは、あなただけの貴重な作品になる。

〈鑑賞文の構成〉

〇ここでは、次の二段落構成で書いてみよう（サンプル参照）。

- ① イメージ （その詩の情景を一場面として思い浮かべ、描写する）＝小説家になる
- ② その詩についての感想・論評（自分の考えを論理的に述べる）＝評論家になる

〈サンプル〉

白 文	書き下し文（全文平仮名）	現代語訳
渡水復渡水	みづをわたり、またみづをわたる。	いくつもの川を渡り
看花還看花	はなをみ、またはなをみる。	あちこちで花を見ながら
春風江上路	しゅんぷうこうじょうよつのみち。	春風そよぐ水辺の道を行く
不覺到君家	おぼえずきみのいえにいたる。	いつのまじか君の家に着いた

高 啓 『尋胡隱君（じゆんくんにたずぬ）』（隠者の胡くんをたずねる）

〇この漢詩から書いた鑑賞文の一例

イ メ ー ジ	<p>薄曇りだが、明るい春の日、中国ふうのひげ、黒い帽子、水色の着物の男性が川辺の道をゆったりと散歩している。木々にはピンクや白の花が咲き、小鳥のさえずりも聞こえる。男性は、春風にひげをなびかせ、川の流れに目をやったり、花を見上げたりして風景を楽しむ風情である。穏やかで、さすがしげな表情。はるか向こうに、隠者の胡くんが住む小さな庵が見える。</p>
感 想 ・ 論 評	<p>親しい友を訪ねていく道。交通手段も限られた時代のことで、おそらくは遠い道のりを長い時間かけて歩いていくのだろう。隠遁して孤高に生きる胡くんを筆者は尊敬し、彼との語らいの時間を何よりの楽しみにしているに違いない。そんな友を訪ねる道は遠くとも、楽しい小旅行だ。春ののどかな風景の中に、友との交流を楽しみにする思いが感じられる詩だと思ふ。</p>

最初は名前を書かずに作業し、先生の指示で書きます。

年 組 番 氏名

《漢詩ら》「イメージで読む鑑賞文」を書く (創作・交流シート)

漢詩

作者

【いいと「探」メッセージ】一人目 (無記名)

【いいと「探」メッセージ】二人目 (無記名)

【いいと「探」メッセージ】三人目 (無記名)

ふり返り

メッセージをもらった感想。また、学習全体をふり返って。